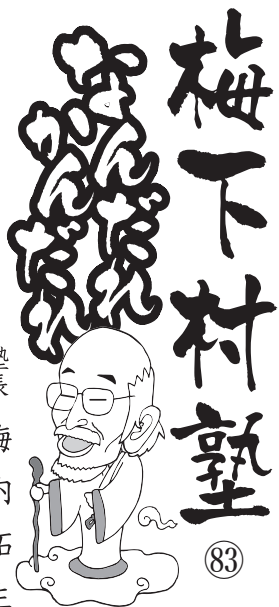


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

気仙地方文化と21世紀文明(5)

(情けは人のためならず)

故事ことわざ辞典には「一人に同情すること、決して他人だけを益することではない。情けを人にかけておけば、その善い報いはめぐりめぐって自分にくるものだ」、「人に親切にしておけば必ずよい報いがある」と、言った説明がある。この言葉は太平記にあり、日本で生まれた言葉である。この言葉の意味は時代とともに変わる。

3月2日の産経新聞の産経抄に「ことわざも誤用が繰り返された結果、本来とは正反対の意味でつかわれるのが一般的になったものがある。さしずめ「情けは人のためならず」は誤用のことわざの横綱である」と述べている。2年前に文化庁が実施した世論調査では、「半数近くが情けをかけて他人を助けるのは、結局その人のた

めにはならない」と意味を取り違えている場合が多いと述べている。

「情けをかける」、これは、それを行う状況で変わってくる。親子兄弟、親族、知人、一般世間、国々(くに)には、(いつ、どこで)という時間と場所の関係、文化の関係、などいろいろである。日本の歴史と文化には情にもろい面がにじみ出ている場合が多いが、これが国の交渉になると命取りになる。

隣の国、中国には「万事、塞翁が馬」といった自分の運命を突き放して、幸運と悲運は廻って来るものだと見る知恵がある。国の政治と経済は世界の政治と経済に密接に絡み合っている。日本の政治家が個人の「情」のレベルで国際政治にコミットした結果、国民が大変な迷惑を被っていることが多々ある。

近隣の国々は、日本の「情」につけ入る隙間を見せると、あの手

この手と、波状攻撃をかけて来る。(情けは人のためならず)、古来の意味と、現代の意味の両方を、それぞれを使い分けをすることを考え、それに「万事、塞翁が馬」の知恵を組み合わせて、世界へのメッセージを発信することを考える時が来ている。気仙地方からは、何をどう発信すべきか、身近なものから、これ考えなければならぬ。

(納得と合意)

江戸の瓦版、中国文化革命の壁新聞、今やツイッターなどのネット情報が流行しており、納得して、そして合意が得られることが一番望ましいと思えますが、そのよううまくいかないのが世の中という生きものです。

浅い納得、深い納得、狭い納得、広い納得、納得の仕方にもいろいろあります。合意も同じです。まずは、自分で情報を集め、整理して、自分で納得することから始めることを心がけることだと思います。

政治の世界では、数は力なりといって汚い手まで使って選挙を戦って、手にした政治勢力を自分を中心とした、党利党略の権益追

求に仕向けて、それでも政治権力の妄想から、身を断ち切れない政治家もいます。

民主主義には西欧のもの、東洋のもの、中南米のもの、中東のもの、アフリカのもの、などいろいろあります。東洋といっても、インド、中国、日本では納得と合意形成のしかたには、大きな違いがあります。

中国のような権力によって情報統制を行う場合、日本のように「由らしむべし、知らしむべからず」といって、見えにくいようにして行う場合など、それぞれに一長一短があります。日本の場合で留意すべきことは、「長いものには巻かれろ」という諺にあるように、巻かれてしまえばなしになることです。申し立てをしないという習慣が残っているからです。

個人の納得に基づき、意見の申し立ては、全体の合意形成には大切です。申し立てをするためには、自分で考えを整理しなければなりません。納得は、情報を集め、これを整理して申し立てを創っている間に生まれて来ます。東海新報が、気仙地方の、この申し立てという意見交換の場になってくれることを望

んでおります。

(東海新報記事から)

2月27日の第1面に「浜の春告げるイサダ漁スタート 初日は142ト水揚げ 昨年より10日早く 豊漁へ期待高まる 大船渡魚市場」が掲載されている。「序盤で魚影も薄いことから初水揚げの数量は前年の6割ほどに。市場関係者らは3月～4月にかけて迎える最盛期での豊漁を願っていた」と報じている。しかし、現在の東北を始めとする日本の水産業全体が振るわないことが指摘されている。

3月2日(土)の読売新聞の第1面に「復興はいま(2) 水産業深刻なプランク」と題して詳しく述べられている。

「1月下旬、宮城県気仙沼市の漁船主や水産加工業者ら15人がノルウエーを訪れた。同国では、水産資源保護のために大きな権限を持った組織があり、インターネットを使って船上で漁が取引され、漁船は落札業者の向上に直接水揚げするなど合理化・機械化が徹底されている。ノルウエーでは水産業従事者一人当たりの年の生産量は100ト超で日本の3

倍以上といわれている。

気仙沼はサンマの水揚げは日本一から昨年は7位に転落した。小松正之政策研究大学院大学教授(海洋政策学)は「震災以前から右肩下がりがだった漁業、水産業を補助金だけ配って現状復旧させるのはジリ貧だ。どこで、なにを、それだけ、どのタイミングで生産するか、市場のニーズを考え、海から消費者までを一つのながれとして捉えた対策が必要だ」と述べている。

まさに、的を得た意見である。梅下村塾(註)で述べた「芭蕉の句はセザンヌの絵にながるか?」の中に述べているものは、日本文化には「構造」への追求への情熱の欠如があるという思いである。

小松正之教授も気仙の広田の生まれて、気仙で育っている。彼は「森と水と命の惑星」のパネリストでもある。小松正之教授の協力も得て、気仙の文化の中からノルウエーの合理的なシステムを吸収して、持続可能な新しい水産業システムを生み出さなければならぬ。東海新報の紙上を使って、このための意見交換と集約を行うのも一つの手である。